令和２年（2020）
阿づまの光

７月号・Julio

【船岡山土、月宮宝座松釉】

教主さまお作　「方舟（救ひの舟）」

今できる、お世話活動を

総務管理課長　椎野恭三

先日、ある信徒の方の依頼を受けて、草刈り作業のお手伝いに行ってきました。70歳代のご夫婦にはお子さんがおられず、体調もややすぐれないこともあり、個人的に依頼があったものです。山際の広い屋敷には畑もあり、よく手入れされているのですが、周辺には草が茂っていました。ご主人と甥っ子さんと3人で半日ほどですが、楽しく草刈り作業をさせていただきました。

特派時代、青森ではりんご農家で、北海道ではメロン農家で、それぞれ収穫のお手伝いをさせていただいたことが思い出されます。本格的な農家のお宅では猫の手も借りたい時期があり、たまたま時間が取れたので、お手伝いに行かせていただいた訳ですが、人が困っているとき、大本人として宣伝使として何かお手伝いをさせていただければと願う次第です。

もう25年ほど前の話ですが、お世話活動の原点を学んだのが、特派で初めて担当した岩手主会でした。それは岩手県花巻市出身の宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」にあります。

「…東に病気のこどもあれば／行って看病してやり／西に疲れた母あれば／行ってその稲の束を負い／南に死にそうな人あれば／行って怖がらなくてもいいといい／北に喧嘩や訴訟があれば／つまらないからやめろといい／日照りのときは涙を流し／寒さの夏はおろおろ歩き／みんなにでくのぼうと呼ばれ／褒められもせず／苦にもされず／そういう者に／私はなりたい…」（原文はカタカナ）

この半年、コロナ禍のなか分所・支部へも行けず、東京本部にも聖地の大祭にも行けずという信徒の方々がたくさんおられるのではないでしょうか。「あの人はどうしているのかな」「あの人は元気にしておられるのだろうか」などいろいろと思いを馳せますが、今こそ毎月お会いできる月次祭がいかにありがたいか、信徒と信徒とのつながりがいかにありがたいかを実感する機会ではないでしょうか。マスクの着用やアルコール消毒などコロナ感染予防を配慮しながら、今できるお世話活動を実施させていただかなくてはと思う次第です。

題字出口直日

通巻第６１６号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 猪子 恒
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

大本（おほもと）の無二（むに）のたからは遠近（をちこち）に
道（みち）つたへ行（ゆ）く宣伝使（せんでんし）なる

出口王仁三郎聖師

大地の恵みに生かされて

～忘れてはいけない「お土」の心～

私たちは大地の上に生を受け、大地の恵みに生かされ、やがて大地へと戻っていきます。大地は、生きとし生けるものすべてにとってかけがえのない存在です。大本では「お土」と敬って呼んでいます。「お土」の姿に思いを寄せるとき、私たちは多くのことを学ぶことができます。

大嘗祭とお米

令和元年11月、天皇陛下が即位されて最も大切な宮中行事「大嘗祭」が行われました。これは天皇陛下が国と国民の安寧や五穀豊穣を天照大神さま、天神地祇に祈って行われる「新嘗祭」を、即位後、初めて行うときに「大嘗祭」として執行されるもので、皇位継承に伴う一世一度の重要な儀式であります。

「大嘗宮の儀」が行われる中心的な神殿に「悠紀殿」「主基殿」があります。そこで天皇陛下が神々に新穀を供え、一緒に召し上がられます。そのお供え物の重要なものにお米があります。悠紀殿にお供えされるお米は東日本の稲田から、主基殿にお供えされるお米は西日本の稲田から献納されます。その場所の選び方は亀の甲羅を炙って占う「亀卜」と呼ばれる儀式によって決めます。このたびの大嘗祭には、東日本の「悠紀斎田」が栃木県高根沢町の稲田、西日本の「主基斎田」が京都府南丹市八木町の稲田が選ばれました。南丹市は大本本部のある亀岡市の隣町で、出口王仁三郎聖師さまにゆかりの地でもあり、嬉しく思っています。

大嘗祭は天武天皇の時代から行われている儀式で、これは天孫降臨と密接にかかわっていると言われています。

天孫降臨は、天照大神さまが孫の瓊々杵尊さまに「三種の神器」と「稲穂」をお渡しになって地上に降したまい、豊葦原の瑞穂の国を高天原のような素晴らしい国にしなさいとお命じになります。大本の皆さんが奏上されている「神言」の「豊葦原の水穂の国を、安国と平らけく所知食さむ・」は、まさにこの場面です。

この瓊々杵尊さまのご使命を代々の天皇さまが継承してこられたのが、大嘗祭にはあるとされています。

豊受大神と稲作

大本の歴史では、大本のご神体山である「本宮山」には、太古、伊勢外宮の祭神・豊受大神さまのお宮があったとされています。そこに奉仕していたのが出口家の先祖でした。その後、豊受大神さまは、丹後の比沼麻奈為神社に移られ、そのときも出口家の先祖がお伴をしてお仕えしていたとされています。比沼麻奈為神社の麓には、豊受大神さまが稲作をされ、日本最古の水田と伝えられる「月の輪田」が今でも大切に守られており、丹波は稲作発祥の地とされています。

豊受大神さまは食物・穀物を司る神であり、雄略天皇の御代に、伊勢神宮の天照大神さまのお食事のお世話をするために、伊勢の外宮に移られます。その折ご神体のお旅所となったのが王仁三郎聖師さまの先祖・上田家の庭内でした。その時、祭典にお供えした稲穂が欅の老木の穴へこぼれ落ち、そこから良質の稲穂が出たので、この地を「穴穂」と呼ぶようになり、転じて「穴太」になったと伝えられています。穴太寺の住職は今でも「穴穂」姓を名乗っています。

実は、聖師さまは、この豊受大神さまとは、国祖・国常立尊さまであるとおっしゃっています。

『富士古文書』（宮下文書）によると、かつて、国常立尊さまは富士山におられ、今の富士吉田で神都を治めておられました。日本がさらに豊かになるようにと富士山から丹波の本宮山に移られ、そこで民に稲作と絹織物を伝えられます。そこから稲作や機織物が全国に広がります。ですから丹波は良米の産地であり、綾部は機織物の町として栄えてきました。下着製品で有名な綾部のグンゼは、もともと絹織物をしていました。

国常立尊さまは、この地球・大地を修理固成された神さまとして「国祖」と呼ばれますが、実際に地上に降臨されて人民に稲作と絹や麻織物を広めて国の基を作られた神さまであり、まさに「国祖」であられたのです。

本宮山の山頂には月山不二があり、その頂上には丸い富士の霊石が安置されていますが、その霊石が発見されたのが、先程の「富士吉田」であり、発見された日時が出口直開祖さまがご昇天になった大正7年11月6日の〝その日〟であったのも不思議なことです。

日本人は、稲作を得たことにより、食べ物に困ることなく、その地に定住することとなります。そこで隣同士、仲良くしましょうという「和」の文化が生まれました。つまり、稲作と機織物の「食と衣」が日本文化の根幹でもあるのです。

〝お恵みとご苦労〟に感謝して

われわれの先祖は、山を切り開いて稲田を作り、大変苦労してお米を作られました。そこから収穫されたお米には、〝お恵みとご苦労〟がいっぱい詰まっています。それは①お米には神さま（火と水と土）のお恵みがある、②日本の祖先神のお恵みがある、③産土の神さまのご守護

～21世紀・生きがい講座～

山田　歌（やまだ　うた）
大本教学研鑽委員会委員

がある、④田を作った先祖のご苦労がある、⑤お米を作られる農家の苦労がある、⑥お米を買う家族のご苦労がある、⑦お米を美味しく炊いてくださる方のご苦労がある――、これだけの〝お恵みとご苦労〟があって、初めて私たちはご飯を頂くことができるということを決して忘れてはいけないと思います。

〝お土〟は大本の教えの根本

大本の教えの根本は〝お土〟です。もっともシンプルで最も重要な教えです。

開教当初、国祖の神さまが開祖さまにおかかりになられたとき、周りの人は開祖さまは気が触れたと思われました。心配した三女の福島久さんがお見舞いに来られると、開祖さまは「わしは大丈夫だから」と久さんを帰らせます。その時、開祖さまは「これが土産（みやげ）じゃ」と言って、板切れにお土を盛られて手渡されました。久さんが「そんな土なんか」と言って返されると、開祖さまは「このお土があるから皆が生きておられるのじゃ。何万円の金よりも一握りのお土のほうがどれほど大切かわからん。世界中の人にこれが分かったらみろくの世になるのじゃ」と申されました。

私たちの足の裏にあるお土が、どれほど大切で有り難いかを悟ること、それが最も大切な大本の教えなのです。

愛善みずほ会でご指導いただいております島本邦彦先生（故人）は、岩石からお土になるまでに2億年かかるとおっしゃいました。そのわずか20～30センチの深さの地面を利用して作物を作り、人類が生きています。その大切な農地を農薬や化学肥料で荒らし、お土から取れたものを食べ散らかして平気で捨てている。農地が私たちの環境を守ってくれているのも忘れて田畑を減らし、便利な現代生活ばかりに目を向けている。日本の自給率は40％にも満たない。お金があればなんでもやっていけると思っていますが、そのお金のために国を奪い合い、争いと貧困が絶えません。

出口すみこ二代教主さまは、お土の心が本当にわかったら、争いというものはなくなるとおっしゃっておられます。

王仁三郎聖師さまは、「農は国の大本（たいほん）」と教えています。また「世の中のすべてのものの大本は土を耕すことに始まる」と示されています。『基本宣伝歌』には、「月日と土の恩を知れ」と記されています。「身土不二」「天産物自給自足」「国民皆農」等、社会の改善はまず食制から変えていくべき、と提唱されています。

出口紅五代教主さまは「お土の匂いのする教団、お土を大切にする教団、お土を実践する教団でありたい」とおっしゃっておられます。このように、大本の教えはお土から離れてはありません。

日本の再生は農業と芸術から

大本は二度目の弾圧によってすべての組織・建物・財産を失いました。しかし、その中から王仁三郎聖師さまがまずなさったのは、耀盌（ようわん）をお作りになることでした。茶盌はお土から作られます。お土と水と火の恵みによって生まれる作品です。さらに食糧増産を提唱され、農業を始められました。

これを思いますと、日本の再生とか再建というものは、農業と芸術ではないかと思います。お土に帰る、お土から始める、ということではないでしょうか。

出口直日三代教主さまは、「この（農の）喜びを、土の上に生をいとなむ人間は、一度は会得すべきでしょう。それが、今なお虚構の多い世の中をよくしてゆく上に、欠かせないばかりか、ほんとうの信仰も芸術も、やはりお土への感謝から芽生えるのではないかと思われます」とお示しになっておられます。

お土の心が世界を良くする

王仁三郎聖師さまは、

「あらがねの土は万有産出の基なりせばおろそかにすな」

「お土からあがりしものを大切にせざればこの世は治まることなし」

出口すみこ二代教主さまは、

「かむながらおつちのこころになるならばこのよにふそくひとつだになし」

「いろいろの理くつをやめて土の恩かみしめてみよ神のありかを」

と示されています。

私は、世界を変えていくキーワードは「お土の心」に帰ることであり、皆が「人群万類愛善・万教同根・万教帰一」の精神になったら、世界中の軍備も撤廃され争いや貧困飢餓も無くなる、みんながお土に親しんで、輸入などしなくても自国ですべて養っていける、そうして「みろくの世」になっていくと思います。

それぞれの生活の中から、ぜひお土を感じていただき、感謝の日々をおくりたいと思います。

掲載文は、令和元年12月28日に航空会館（港区新橋）で開催した「21世紀・生きがい講座」講演録の要旨です。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・人類愛善会創立記念祭典・市杵島姫命例祭は6月14日午前10時30分から、斎主・加藤道明祭務課長のもと執行され、65人が参拝した。

祭員は神奈川主会が、伶人は二絃の会関東支部、大本神諭拝読は朝倉暢子群馬主会長が担当した。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、当日は関東教区総代・主会長、分所・支部長が代表参拝し、一般の参拝は自粛を呼びかけた中での祭典となった。代わりに、自宅からの参拝を推進するため、祭典の模様はインターネットを通じて全国に動画がライブ配信され、映像を通し遠隔地からも遥拝された。

祭典後、猪子恒東京宣教センター長があいさつに立ち、コロナウイルス感染症の現状を語る中で、ブラジルの草野エーリオ南米本部長から届いた手紙を紹介。「今ブラジルでは80万人の感染者が確認される中、本部では亀岡天恩郷・万祥殿において、新型コロナウイルス感染症・終息オンライン一斉祈願祭を毎週土曜日、夜9時から行っている。また、御祈願の様子はインターネットを通してライブ配信をしている」と述べ。ライブ配信の視聴、ご祈願を勧めた。

金剛流仕舞「高砂」の奉納

小林龍雄・人類愛善会理事

引き続き本部職員・信徒有志による金剛流仕舞「高砂」（シテ・猪子恒東京宣教センター長）が奉納された。

続いて、小林龍雄・人類愛善会理事があいさつに立ち、人類愛善会の活動としてエコバックやマイボトルの携帯、マイ箸運動について説明。また、大本南米本部があるブラジル・ジャンギーラ市へ、手作りマスクを送る支援活動を紹介し、新型コロナウイルスで多くの感染者が出ている同市に、少しでも支援の和が広がるようにと呼びかけた。

この取り組みは、ジャンギーラ市と姉妹都市を結ぶ亀岡市が「手作りマスクで姉妹都市サポートプロジェクト」として薦めている活動に賛同するもので、大本では人類愛善会総本部が窓口となっている。亀岡市でのマスク募集期間が過ぎたあとは、総本部から独自にジャンギーラ市へマスクが送付される。

21世紀・生きがい講座

第206回21世紀・生きがい講座は5月20日午後7時から、大本東京本部YouTubeチャンネルにて配信され、柿崎哲男愛善宣教課主事が「祈りとともにある生活」～本当の幸福とは～と題して講話した。

柿崎講師は「祈りの語源に〝意を宣る〟とあり、自分の意志や希望を言霊にすることで自分自身に対しても襟を正す、目標に向かって努力するきっかけになる」と説明。また、〝冠婚葬祭〟の持つ意味に触れ、「日本では古来、祈りという行為は宗教・宗派によらず、生活の一部であり、日常のごく自然の心情からきているものである」として、「祈りの対象となる神仏に対しては〝意を宣る〟言霊によって、小声であっても願いや思いの丈を言上げる事が大切」であると語った。

また、出口王仁三郎聖師さまは「神の前だけではなく人の前でも善言美詞を用いねばならぬ」と示されている。私たちは、「神さまに対しても周囲の人に対しても、同じように良い言霊、良い想念で接し、周囲を信じ社会全体の向上を念じる事が大切である」と述べた。

8月 東光苑祭典・行事予定

7日（金）午前10時30分～
開教128年 瑞生大祭遥拝祭

9日（日）午前10時30分～
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

19日（水）午後7時～8時30分
21世紀・生きがい講座（大本東京本部）
講題 命の尊厳を考える
～医療の現場から～
講師 加藤 眞三
（慶應義塾大学看護医療学部教授）

24日（月）夕拝後～
神集祭遥拝祭（初日・旧7月6日）

30日（日）夕拝後～
神集祭遥拝祭（最終日・旧7月12日）

※行事の延期や中止、祭典の参拝をご遠慮いただくなど、予定を変更する可能性があります。

大本東京本部ホームページ

ホームページでは、祭典・行事のご案内をはじめ、動画の配信、大本東京本部所蔵の耀盌や、歴代教主・教主補さまのお作品が閲覧できます。また、機関紙「阿づまの光」もWEBページで、〝いつでもどこでも〟ご覧いただけます！

下のQRコード・URLからアクセスしてください。

また、Facebook（フェイスブック）・YouTube（ユーチューブ）でも各講座・行事のご案内や、お示しなどを紹介しています。大本東京本部「Facebook」または「YouTube」で検索してください。

↓ 東京本部ホームページの最初の画面

下記のQRコード・URLからアクセス！

大本東京本部ホームページ
URL http://oomoto-tokyo.com